

本のむこう側 第88回

永江 朗

「おしゃれ」と「しゃれ」はたった一字でずいぶん違う。「ダンディ」という言葉は、ちょうど「おしゃれ」と「しゃれ」の間に位置する。中野香織「ダンディズムの系譜」は、ダンディという概念がどのようにして生まれ、どんな人がダンディと呼ばれてきたのかを考える本である。過去のダンディとして登場するのは、近代メンズ・ファッション史に必ず出てくるボー・ブランメルや作家のオスカー・ワイルド、俳優・映画監督だったノエル・カワード、タイの結び方ウィングザー・ノットに名を残すエドワード8世など。いずれもおしゃれ上手と言われる人たちだ。

うっかり手を出すとケガをする!? ひねくれものの「ダンディズム」。

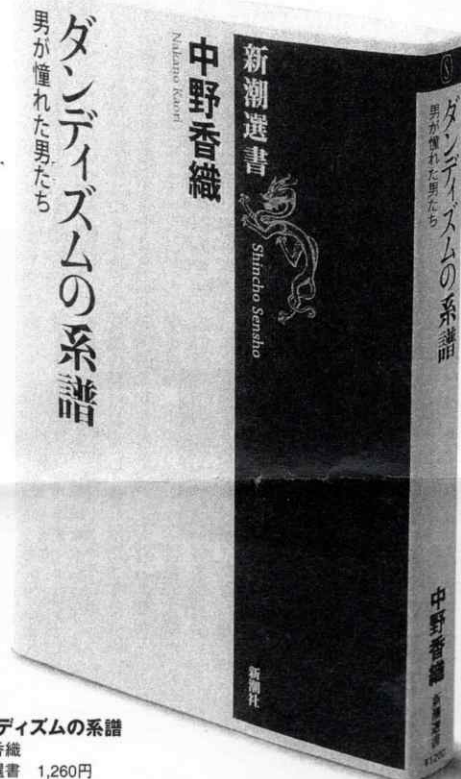
だが彼らが同時代においてもおしゃれだと評価されていたかという点、必ずしもそうではない。非難や蜚言、軽蔑だつて多かったのだ。しかも彼らは悪評を自覚していただけでなく、楽しんでた。自分を笑う世間を嗤っていたのである。ひねくれているという点、底意地が悪いという点。

自分で決めた美学に忠実という意味で芸術家に似ているが、ダンディの根底には自分も含む世の中に対する冷笑的な態度がある。それはたとえばタイの結び方にこだわりのつ、彼を称賛する人も非難する人も等しく軽蔑しつつ、「ほら、たかがタイにこんなエニエル

だがある。流行遅れだろうと色が変わろうと、寒さをしのぐのに不都合はない。どうでもいいから凝ると楽しいのである。しかし、どうでもいいということをお忘れしまつとたちまち野暮になる。ひとところ流行つたへちよい不良オヤジも、しゃれでやっているぶんにはよかったけれども、本当にあればおしゃれだと信じている人があらわれると、周囲は居心地が悪くなる。笑うに笑えなくて痛々しい。

中野香織が紹介するダンディたちの最期はあまり幸福と言えない。ブランメルは精神を病んだあげくに異国の慈善病院で孤独に死んだ。ワイルドは男色の罪で懲役2年の重労働刑に処せられてボロボロになった。コッソツと努力して口福ばかりの幸福をつかみ取りも、太く短くはかばかしい一生を送るのがダンディズムである。ダンディズムは私たち一般庶民にとってお手本というよりも反面教師である。どうせオレは世の中をついでに生きていただけだから、と降りちゃった人だけがダンディズムを遊ぶことができる。

ダンディズムの系譜
男が憧れた男たち



ダンディズムの系譜
中野香織
新潮選書 1,260円

新潮選書
中野香織
Shincho Sensho

新潮社



ながえ あきら
某PR誌の仕事でユーミンにインタビューすることになった。準備のため、ユーミンばかり聴くこの1カ月間。でもカラオケで歌えるレベルにはなかなか達せず。意外と難解?